

『私の趣味』 ～山登りを始めてまる4年～会津支部事務局 景山貞治

きっかけ 中年太りを気にし始め、家の周囲を歩き始めたことが山へ登るきっかけになりました。本郷や喜多方を歩き、夏には裏磐梯を歩いていました。ある日「磐梯山にでも登って見たら？」と知人の言葉により、一念発起。そのときには磐梯山へは相当な体力が必要なんだろうなあと思いながら登山用の体力作りを始めました。



一座目 金沢峠に車を止め『猫魔ヶ岳』へ。雄国沼を散策し、猫魔ヶ岳に登頂しました。しかし、その下山ルートで熊に遭遇します。目の前を黒い熊が吠えながら、枝を折りながら疾走してくるではありませんか、あわてて登り返し何とか車に辿り着きました。周囲の人に笑われたり、心配されたりで「山は基本一人では行くものでない」と教わりました。（一人ですと自分のペースで登れることや自己責任の能力が高まるのはいい事なのですが・・・）

二座目 手軽に登れてちょっとメジャーな『一切経山』の魔女の瞳と呼ばれる沼を見に行きました。手軽に登れると思った筈が、体力がまだなく、途中で山ガールなるものにも抜かれる始末。しかし、山頂から眺める魔女の瞳に魅せられ、山にのめり込む要素が作られた気がします。

三座目 遂に『磐梯山』に挑戦。登れるかなあと感じながら登ってみました。案外楽にのぼれました。後で聞いてみたら八方台からが一番楽なようです。山頂から猪苗代湖を上から眺める。「おお、素晴らしい。遠くの山々も見えてはいませんか」などと感じながらおにぎりをおいしく食べることができました。

二年目からは徐々に山の道具を増やし、本格的に始めました。会津の『浅草岳』、『会津朝日岳』、新潟の『八海山』、『荒沢岳』、日本百名山の『安達太良山』、『会津駒ヶ岳』などをやっとやっとでしたが登ることができました。そして、**三年目**にして『飯豊山（飯豊本山）』に日帰り挑戦しました。しかし、下山でペースが落ち、小屋番さんの勧めもあり、三国小屋で人生初めての山小屋泊となりました。

四年目は、体力も付いてきたため、ちょっとした山でも登れるようになり、「少し痩せた?」、「絞まった?」などと言われ調子づき、山登りの回数も増えました。昨年は、北アルプスの入門編である『唐松岳』。岩登りの経験を生かし、『妙義山』の表妙義の完全縦走ができました。最近では一緒に登ってくれる方もでき、酸ヶ湯温泉に宿泊し『八甲田山』へも登ることができたり、『大菩薩嶺』への遠征など充実した山登りをすることができました。

今年は『白馬岳』、『妙高山・火打山』、『早池峰山』などに登りたいと計画しています。「どうして山に登るの」と問われることが多くなってきましたが、未だに返答に困ります。山にはいろいろな要素があります。「計画通り実行できた時の達成感」「花々や木々の美しさや神秘的な風景」「昼食や行動食の美味しさ」「人との出会い」「疲労後の温泉」そして、普段見られないものを見ると、脳内で何かが分泌されているような気がします。山から下りてくると、また登りたくなります。そうすると「明日も頑張ろう」と意欲も湧いてきます。なので、未だにやめられないのでそれが答えかも知れません。



「私の趣味」(有)小手森建築板金工事店 小手森重孝

皆さんも色々な趣味をお持ちだと思います。私の趣味は落語を聞くこととあります。通勤時間などちょっとした移動の際は車の中で落語を聞きます。

落語は江戸時代から続く伝統的な話芸で噺の最後に『落ち（サゲ）』がつくのが特徴です。能楽や歌舞伎などの伝統芸能と違い衣装や道具、音曲に頼ることは少なく、ひとり何役も演じ身振り手振りのみで物語を進め、また扇子や手拭いを使ってあらゆるものを表現する独特の演芸です。滑稽噺、人情噺、怪談噺など沢山の種類があります。

『落語とは、人間の業の肯定である』と立川談志は評しました。人間というものの業、それは知性でも理性でもどうにでもならないもの、世間では”よくない”とされているもの。それらのことを肯定し演じるのが落語だということです。

日々真面目に生活し、世のため他人のために生きる。そんな人が素晴らしいとされますが、実際には、仕事なんかしたくないし怠けたい。お酒も好きだし賭け事も好き。楽をして生きていきたいという人もいます。そんな生き方さえも認めてしまおう、というのが落語です。

落語の代表的な演目の一つに『厩火事』があります。髪結いで亭主を食べさせているお崎が仲人の家に来る。今度こそ昼間から酒ばかり飲んでる亭主に愛想が尽きたので、別れたいという。仲人も、女房だけ働かせ遊んでいる亭主などとはもう別れてしまった方がいいと言い出す。すると、お崎の方は亭主を悪く言う仲人に不満で、亭主の肩を持ち始め、のろけまで言い出す始末。呆れた仲人が、亭主のほんとうの了見を知るための二つの話をお崎にする。

一つは孔子の話。孔子の留守中に馬小屋が火事になって一番可愛がっていた白馬が焼死した時のこと。帰ってきた孔子は門弟や、家人の体のことを気づかい心配し、白馬のことには一言も触れなかったという故事。

二つめは、瀬戸物に凝っている麴町のある屋敷の旦那の話。集めた品を客に見せた後、女房が瀬戸物をしまおうとして運ぶ途中に階段で転んだ時のこと。旦那は「瀬戸物は大丈夫か」しか言わず、女房に「怪我はなかったか」などとは一言も聞かなかった。以後、女房は里へ帰り、里の方からこんな薄情な家には嫁がせておくわけにはいかないので、離縁してくれと言われ、結局、離縁状を書くはめになったという話。

お崎の亭主も瀬戸物に夢中だということで、仲人は亭主が一番大事にしている瀬戸物を落として割ってみろという。もし、亭主がお前の身体を少しでも心配すればよし、瀬戸物のことばかり言っているようなら見込みがないから別れてしまえと言う。お崎が家に帰ると亭主が夕飯を一緒に食べようと待っている。お崎は頃合いを見計らって、押入れから瀬戸物を出し、台所でよろけて割ってしまう。すると亭主は、お崎の体のことばかり心配し、瀬戸物のことは一言も言わない。うれし泣きして、

お崎「お前さん、そんなにあたしのからだが大らかい」

亭主「あたりめえだ、お前に怪我されてみねえな、あしたから遊んでいて酒が飲めねえや」とても不条理で、すごいブラックユーモア。この噺は落語らしい演目で滑稽噺の代表的なものです。

この他にも色々な演目があります。秋から冬にかけての噺としては『目黒のさんま』『火事息子』『文七元結』『芝浜』などなど。私は年に数回好きな落語家の独演会に行きます。春に人間国宝・柳家小三治の落語を聞きましたが、その話芸のすばらしさに圧倒されました。実際に生の落語を聞きに行かなくても、レンタルショップに行けば色々な落語家のCDを借りて様々な演目を聞くことができます。

秋の夜長に落語を聞きながらゆっくりと過ごす。ぜひともお試しください。

